

住民目線にたった水害ハザードマップのあり方について～委員会報告～

●住民目線にたった水害ハザードマップのあり方についてのポイント

1. 水害ハザードマップのあり方について

- ✓ 主に水害時の住民避難に活用されることを目的に、第一に住民目線で作成される必要がある
- ✓ 「水害リスクを算出する土木部局等」と「避難に関して検討を行う防災部局等」が連携し、作成、利活用を積極的に行う

2. 水害ハザードマップ作成の手引きのあり方

- ✓ 手引きは作成にあたっての方法や内容を細かく定めるものではなく、利活用等の取組を推進するにあたり考え方や推奨される事例を示すもの

3. 地域における水害特性等の分析

- ✓ 事前に各地域の水害リスクを住民目線で把握する必要があり、地域特性や地域コミュニティの状況を含めて総合的に水害特性を分析することが重要

4. シチュエーションに応じた水害ハザードマップ

4.1.水害ハザードマップの利活用シチュエーションの検討

- ✓ ①いつ・②どこで・③誰が の観点から水害ハザードマップを作成することが重要
- ✓ 「災害発生前にしっかり勉強する場面」と「災害時に緊急的確認する場面」を念頭に作成すべき

4.2.早期の立退き避難が必要な区域の表示

- ✓ 家屋倒壊等氾濫想定区域等の早期の立退き避難が必要な区域を市町村において検討し、表示
- ✓ 上記以外の区域についても、「立退き避難が望ましいが浸水時に想定される状況を踏まえ、自らの判断により屋内安全確保でもよい」と記述
- ✓ 「家屋倒壊等氾濫想定区域」の名称について、「氾濫や侵食のリスクを示す区域」を強調したものとすべきとの提案があったが、「家屋倒壊等をもたらすような氾濫が想定される」といった現象面が曖昧になることから上記の名称を用いる
- ✓ 家屋倒壊等氾濫想定区域の意味、意義等についても情報・学習編に記載し、住民等に丁寧に説明する

4.3.水害ハザードマップにおける複数災害の取扱い

- ✓ 地域ごとの水害特性から、複数の災害の情報を重ねて表示すること／個別に表示すること等の表示方法を検討することが重要
- ✓ 実際の重ね表示事例を掲載し、検討する上でのメリット、デメリットの整理を行った
- ✓ 重ね表示は紙媒体での表現が難しいため、IT化に向けた取組の検討を進めるべき

4.4.閾値・配色について

- ✓ 水害リスク表示等の最低限のルールについて、地域間や災害間で統一

5. 想定最大規模の避難への対応

- ✓ 想定最大規模の水害に係る避難計画の検討が必要
- ✓ 計画規模等の水害と、想定最大規模の水害とで大きく避難行動が異なる場合は、想定最大規模に対応した避難場所（2次避難場所）や安全に2次避難できるような移行基準等を検討したうえで、まずは発生頻度の高い水害に対応する避難計画を検討
- ✓ この場合、想定最大規模の水害も起こりうることから、想定最大の浸水域、2次避難場所、避難場所への移動手段も記載

6. 広域避難への対応

- ✓ 広域避難の検討に係る着眼点として地形上の観点と避難の観点から必要となる調整事項等を整理

7. 水害ハザードマップの利活用

- ✓ 様々な機会を捉えて活用し理解の促進・徹底を図ることが重要であり、時に、「住民等が自ら手を動かす取組」について積極的に行うことが重要
- ✓ 単に作成するだけではなく、様々な機会を捉えて活用することが重要
- ✓ 今後の手引きは、利活用のねらいや効果、課題を整理し、参考事例の充実を図る
- ✓ 住民等の避難のみならず水害に強い地域づくり活用しつつ、ハード・ソフト対策を一体的に進める